

一八八三年七月十四日(土)

〔聖ラーマクリシュナと高名な歌手——アダルの家で大きくチャンディーの歌〕

この日タクールは、カルカッタのベネトラ街にあるアダルの家においてになった。アシャル白分十日目。一八八三年七月十四日、土曜日。アダルはタクールに、ラージナラヤン(当時の高名な歌手)のチャンディーの歌をおきかせる予定なのだ。ラカール、校長たちがお供をした。礼拝室の前の中庭で歌の催しが行われた。ラージナラヤンは唱った——

(訳註、チャンディー——ヒンドゥーの聖典『デーヴィー・マハートミヤ』のこと。母なる神を根本原理としてのべてある)

無畏のみ足もとに命あずけて

われにふたたび死の恐れなし

カーリーの名は大いなる真言まこと

上なく高き智慧を獲し

われ世の市いちに身を売りて

聖きドウルガーの名を買いぬ

カーリーの名の生命の木

胸のみどりの野に植えぬ

死の来りなば ひろやかに

わが安らぎを見せばやな

体のなかのむたり六人の賊を

はるか彼方に追いやりて

われはドウルガーの名をたたえ

ドウルガーの名と共に行くなり

タクールは、少しおききになると前三昧状態で立ち上がられ、歌手団といっしょになってお歌いになった。

タクールは、〃おおマー、ここにいて、マー〃などの即興句をお入れになる。そうしていらつしゃるうちに、完全に三昧にお入りになった。外部の意識は消えて微動もせず！ お立ちになったまま。

——歌手は再びうたい出した。

戦の場にはに 光りかがやく

あの女は いかなるひとか

一八八四年十月十八日に全訳あり

タクールは三昧に入ったまま！

歌が終わって礼拝室の中庭から出られたタクールは、二階の応接間で信者たちといっしょにお坐りになった。いろいろ、神に関するお話があった。それから、ちよつと掘れば地面の下に水が流れているパルグ河のように、外からは内面の様子が全く分からない信者たちのお話しもあった。(訳註、パルグ河——聖地ガヤーの近くにある河)